

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年2月15日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 技術補佐員

氏 名 牧 瀬 英 幹

助 成 の 種 類	平成22年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研 究 課 題 名	「彼岸」への関係を巡る人間の社会的行動に関する精神分析的研究		
受 入 機 関	Manchester Metropolitan University (Research Institute for Health and Social Change)		
渡 航 期 間	平成 23 年 6 月 3 日 ～ 平成 25 年 2 月 6 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	2,500,000円	
	使用した助成金額	2,500,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航費	150,000円
		滞在費	2,350,000円

成果の概要 / 牧瀬英幹

本研究の目的は、人間の社会的行動が「彼岸」への関係においてどのように構造化されているかを、精神分析的に検証することである。近年の社会変動の中、我々は「彼岸」への関係を支える通時的伝承の危機に直面しており、その結果「生」と「死」を巡る様々な問題を、矛盾を孕んだ状態で抱え込んでいる。当事者はそのことを「知らないまま」動いているが、そこには無意識の精神活動を介しての、「彼岸」への関係という規定要因がある。また、集団的な儀式活動においても、「彼岸」への関係による社会的な影響は甚大であるにもかかわらず、集団の一人ひとりとはそれほどそれを強く意識していないという逆説がある。我々は今、この関係を新たな言葉で捉え直す必要がある。そこで、今回は、日本・イギリス両国間の比較を通して、この問題への接近を試みた。

派遣先においては、イギリスにおける精神性の伝達様式と「彼岸」の扱いに関わる文献資料、文学、芸術、症例記述などを検討し、そこに見出される特性が如何にイギリスの人々の社会的行動と結びついているかを検討した。また、精神分析家である受け入れ教授との会合を通して、そうした特性と人々の抱える苦悩との連関についての議論を積み重ねた。その中で、イギリスの精神分析や精神療法が直接的には見えにくい形でユダヤ教、キリスト教的な伝統を受け継いでいること、また、そうした伝統が「彼岸」との関係と密接に結びつきながら人々の社会的行動を規定しているのみならず、イギリスの精神医療制度全体の文脈にも影響を与えている可能性が示唆された。さらに、イギリスの精神医療を問い直すことを目的とする研究会や、精神分析と集団療法に関する研究会、地域の精神的な病に苦しむ人々が集まりその苦悩を語り合う会などに参加することで、イギリスもまた日本と同様、人々が「彼岸」との関係を再構成する場を失いつつあること、また、そうした社会変動に伴い、人々が「知らないまま」に無意識の葛藤を抱え込んでいる状況を把握することができた。

加えて、派遣先では精神分析や批判心理学に関する講義が開かれており、可能な限り出席し、その考え方を学んだ。特に、受け入れ教授の専門の一つである批判心理学の考え方は、「彼岸」との関係を重視しない現在の社会的傾向と心理学の興隆との結びつきを考察する上で、有意義なツールとなるように思われた。この点に関する検討は、今後の課題となろう。また、派遣先の大学が主催する学会にて、日本における精神性の伝達様式と「彼岸」の扱いを子どもとの臨床実践を通して考察した研究を発表し、本研究の問題意識の共有を訴えた。この研究発表は、論文としてまとめ直し、イギリスの学会誌に投稿した。現在、査読審査中である。

現時点までに公表された本研究の成果は、以下の3論文である。①イギリスにおける「彼岸」の扱いの特性に関わる文献資料、文学、症例記述の検討を踏まえながら、精神分析における「彼岸」と「伝承」の概念と臨床的問題との関係性について論じた「精神分析における『彼岸』と『伝承』の概念とその臨床的意義」(『日本における言語実践の世代的伝達に関する精神分析的研究—文字と語らいの諸相—』(研究代表者：新宮一成)平成 21-23 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書 (2012.3) 所収)、②かつての日本において、妊娠・出産に纏わる対象喪失に直面した女性が如何にその喪失と向き合い、自身と「彼岸」との関係の再構成を試みたかについて論じた「『絵解き』の技と喪の病理—熊野比丘尼の『絵解き』における妊娠・出産に纏わる対象喪失の問

題」(日本病跡学雑誌 No.83 (2012.6) 所収)、③「彼岸」との関係において、如何にして主体と時代が創造性を介して結びつくかについて論じた「時代の変遷と躁うつ病—時代と主体を結ぶものとしての芳年の創造性—」(日本病跡学雑誌 No.85 (2013.6) 印刷中)、である。今後、今回の研究で学び得た知見をもとに、日本・イギリス両国間の精神性の伝達様式、「彼岸」の扱い方の特性の共通点と差異をまとめ、本研究を更に前進させていく予定である。その一段階として、イギリス芸術を代表する存在の一人であるターナーの創造性の意義を、「彼岸」との関係構築と世代間伝承の観点から検討した論文を書き上げた。この論文は現在、査読審査中である。

上記のような派遣先での研究生活に加えて、Centre for Freudian Analysis and Researchにて精神分析を学ぶことができたこと、また、日本語と英語という2つの言語の間を行き来しながら自己分析を受け、自分自身の「彼岸」との関係の問題に取り組めたことは、貴重な経験となった。この経験は、今後本研究の観点から我々の臨床的活動を組み立て直していく上で、大きな意義を持つてくると思われる。このように充実した在外研究に取り組めたのは、一重に貴財団の支援によるものである。ここに、その感謝の意を記すとともに、厚く御礼申し上げたい。